

図書館はどこ？

加藤 恭子（助手 人事労務管理専攻）

ちょうど1年前、アメリカはオーバン大学の大学院の授業でのこと。先生が「この資料は図書館に行かないと手に入らないんだよね」と言うと、大学院生が透かさずこう答えた。

「図書館はどこにあるんでしょうか？」

続いて、一同大爆笑……。オーバン大学の図書館はメイン・ゲートの真横にある立派な建物で、もちろん大学の人間なら場所を知らない人などいない。しかし、アメリカではほとんどの論文がインターネットでダウンロードできるため、図書館に行かずとも必要なものが座ったまま簡単に手に入る。自分の研究室とパソコン・プリンターが与えられている大学院生はなおのことで、「そういえば、最近図書館に行っていないな」とみな口を揃えていた。

といっても、アメリカの大学生が図書館に行かないというお話ではなくて、研究室など持たない学部生は足繁く図書館に通っていたようだ。それに、なんと言っても便利なのが、朝は7時45分から夜は午前2時まで開いていること。夜型の私は、夕食を食べ終わってからまた図書館に戻り、午後1時に図書館地下のスタバが閉まる直前に気付けのcapuchinoなどを買って、午前2時まで粘る、という生活習慣になっていた。家にいると「もう寝てしまおうかな」とつつい自分甘くなってしまうところを、図書館で他の人が頑張っているところを見れば、自分も頑張れるのだ。

場所はちょっと変わって、イギリスはケンブリッジ大学の図書館のこと。8年前ということもあり、コンピュータの検索システムが今ほど整っておらず、必要な本を求めて図書館を右往左往。1時間ぐらいして漸くその本に辿り着いたと思いきや、手にとって見ると、自分の求めていたものと違ってひどくがっかり。そこで、悔し紛れに隣の本などを漁ってみると、今日汗を流してきたのはあなたにめぐり合うためです（ちょっと大袈裟か……）というほどの千載一遇の本に出会い感激する、なんてこともしばしば。不便ではあるけれど、やはり本はネットで調べるだけでなく、書棚から探した方がいい、と肝に銘じた。

ところで、これは蛇足だが、ケンブリッジ大学の図書館でなんといっても気に入っているのは食堂である。メニューだけでなく人間のバラエティーも豊かで、ものすごく甘そうなケーキをおいしそうに頬張るアインシュタインのような教授など、人間観察をしたら1日などあっという間に過ぎてしまう。おまけに、朝10時に焼きあがるスコーンはイギリスの有名どころのアフタヌーンティーで出されるものよりもずっと美味しく、このスコーンのために、朝が弱い私も毎朝10時に図書館に行くことができた。

最後に、私の地元にある浦安市立図書館。市民一人当たりの貸出冊数全国1位と言われているだけあり、使い心地も居心地も本当にいい。勉強にも読書にもそれほど熱心でなかった私が図書館を好きになれたのはここのおかげだ。大学受験、学期末試験そして大学院受験などなど試験とあらばこの自習室に通った。が、勉強に集中しようとするればするほど、小説や文芸誌の読書数が増えていくばかりで……。ところで、この図書館で最近気になるのは、自習室で勉強している年齢層が上がっていることだ。10年前は大学受験生ばかりだったが、30～40代と思われる男性が半数近くを占める。大学受験が楽になる一方で、社会人としてのサバイバルが大変になった状況を反映しているのだろうか。しかし、人生において大学受験とともに勉強がすべて終わってしまうのではない。むしろそれからのほうが長いわけで、不況を期に自分自身のキャリアを見つめ直し、みなが生涯学習に目覚めたと思えば、なかなか良いことと思う。

これ以外にも行きつけの図書館はたくさんあるが、国内外を問わず、図書館にはそれぞれの個性がある。本好きな人や勉強熱心な人が図書館に通うのは訳ないことだが、そうでない人でも気に入った図書館を見つけておく、というのは、目の前のレポートを終わらせるだけでなく、将来きっと役に立つはずだ。上記のオーバン大学やケンブリッジ大学も経済学部の提携校なので、興味があれば在学中に行ってみるのも良いかもしれない。

最後に、肝心の経済学部の図書館、どこにあるかご存知ですか？ここでは、全く触れませんでした。是非、自分で使って、どんなものかと個性を確かめることから始めてみてはいかがでしょうか。